

# 今次戦争の終戦後も30年間

## 現地で勤めた小野田寛郎氏

伊佐 二久 陸士55

大東亜戦争は昭和16年真珠湾攻撃で開戦、昭和20年に天皇陛下の御聖断で終戦となったが、その後も30年間現地に留まってフィリピンのジャングルに立てこもり勤めた小野田寛郎氏（ひろゆき）のことはあまり知られていないと思ひご紹介することにしました。

この文の一部は伊勢雅臣氏の資料から引用させていただいたことを報告し感謝申し上げます。

これは地位も名誉も金も要らない、国と国民のために捨て石となった、今ではあり得ない人と思つてゐる。

小野田氏は1922年3月19日生まれで、2014年1月16日に逝去されている。海南中学校を卒業後、貿易会社に就職して、今コロナ肺炎で問題になっているなど自由な生活を楽しんでゐた。その後久留米第一陸軍予備士官学校卒業で陸軍予備少尉に任ぜられた。

姑娘（クニーヤンと言つてゐた）を口説けるほど中国語が巧みなのを買われて、陸軍の諜報員養成機関、中野学校二俣分校入校、そこでわずか3カ月

の訓練後、1944年12月に22歳にして米軍上陸間近のフィリピン、ルバング島に送られ、そこで「離島残置諜者」として米軍占領後のゲリラ指揮を命ぜられ、30年間終戦後も勤めた後、1974年3月51歳で帰国している。

彼は現役の軍人でもなく中野学校でも3カ月しか訓練されてないのに、このような重要任務を命ぜられるとは、彼がいかに優秀な人で、精神的にも軍人以上の人だったことがわかる。

終戦後フィリピン警察軍による93回の討伐にも屈せずに戦い抜き、その間姉や兄弟による現地での呼びかけにも応じず、最後に元上官からの命令を受けてようやく投降している。

フィリピンでは島田庄一伍長、赤津勇一一等兵、小塚金七一等兵の3人と協同生活し死生を共にしていたが、これについては後記する。

投降後小野田少尉はマルコス大統領に「30年間もジャングルで生き抜いた強い意志は尊敬に値する」と称賛され、過去の行為はすべて赦されている。

小野田氏が大統領と会われた時、30年間愛用していた軍刀を差し上げておられる。

それから40年後、小野田さんは亡くなられたが、米紙ニューヨーク・タイムズは小野田さんの忠誠心と忍耐力を評価し、「戦後の繁栄と物質主義の広

がりの中で多くの日本人が失つたと感じていた誇りを呼び覚ました」と評している。

私は外国のマスコミが称賛しており、本稿でも理解していただければ嬉しく思つてゐる。

彼は1975年ブラジルに移住して牧場を経営、後に帰国して小野田自然塾を開き、野外活動で子供たちに自立の必要性を説いている。

小野田氏が訓練された陸軍中野学校はどんな学校だったのか。戦時中、私も学校の名前だけは知つていたが、詳しいことは学校の性格上秘密であつたと思われる。

「本日からいつさい軍服を着てはならぬ」

1938年春に第一期生が募集されたが名前は「後方勤務要員養成所」で、陸軍大臣命令で各部隊に1ないし数名の最優秀者を推薦するよう指示され、その中から家族や思想など厳密な審査の末、20名が選ばれたが、当時の最優秀者と言つてもよいと思われる。

背広姿の紳士（秋草中佐）が迎えに来たので、一人が慌てて立ち上がり不動の姿勢で挙手の礼をしたら「平服で敬礼するやつがいるか」と叱られたとのこと。

てはならぬ」と言われて、皆が情けない顔をしたとのこと。

専任教官が3人いたが、所長は学校設立者の一人、秋草俊中佐で以下の訓示があつた。

「戦争は従来の野戦から国の総力を集中する総力戦に移行している。軍の情報も大使館、公使館付き武官の情報のみでは不十分だ。武官は2〜5年の短期で移動するから社会常識に無知で、その国の詳しい情報に乏しい。諸君はこの施設で訓育を受けた後、おそらくソビエト、中国、米英など外国に派遣され定住する覚悟で、武官では得られない情報をさぐるべきである」と。

中野学校は期によって教育目的が異なり、第一期生は単独で外国に潜入し、一般市民と同じように定住して諜報勤務についていた。

それからの生活は軍隊とは大違ひの自由なもので、午前10時から午後5時までは学科があつたが、それ以外の時間は全く自由で門限もなく、外泊さえも可能であつた。

ある時秋草中佐が同席して会話中、「天皇」の御名が出たので、直立姿勢をとつたら「バカ者、お前たちが民間人に成りすましていても、たちまちバテてしまふ」と叱られた由。

秋草所長は優秀な人でロシア語はじめ各国語に通じ、対ソ諜報の第一人者

であった。

終戦時は少将で満洲ハルビンの特務機関長をしていたが、ソ連軍が満洲に攻め込んだ時、「俺が逃げたら誰かが代わりに逮捕されるから逃げない」と言つて動かず、捕らえられてハバロフスクの収容所に送られたが、その後の消息は不明である。おそらく収容所で死亡されたのであろう。

秋草所長は一期生に以下のように説いている。

「諸君は民間人として外国に潜り込む。検査されたらスパイとして捕らえられ銃殺されるかもしれない。諸君は優秀であるが、今の日本が必要なのは名利を求めず、身を捨てて日本民族の発展の捨て石となる人物だ。しかしこれは強制は出来ない。もしもいやだと思ふなら今からでも遠慮なく申し出るように」と言われた。

その結果全員が「陸軍の軍籍は除いてほしい」と申し出たが教官たちはその覚悟に感激しながら「民間人からの情報では軍が取り上げない」と説いて軍籍除去は思いとどめさせたとのこと。英国では利益を度外視して国と国民の為に働く諜報員を名誉な仕事と考えている。

ボーイスカウトの創設者であるロバート・ベードンは諜報官として活躍した人であるが、「諜報活動こそ男子

の愉快なスポーツ」と言っている。

ちなみにスカウトとは偵察とか斥候を意味しており、諜報活動と関係ある言葉である。

小野田氏は帰国後ジャングル生活を顧みて、「若い意気盛んな時に大事な仕事を全身でやったことを幸福に思います」と語っている。

ここで小野田氏と死生を共にした方々のルバング島の生活を記述する。

1945年2月28日米軍がルバング島に上陸、少数の日本軍は対戦したが大差の戦力で全滅、一部は山中に逃げ込んだが数十名は投降した。小野田氏ら4名は山中に潜伏し無事であった。同年8月15日終戦となり投降勧告のビラがまかれた。12月山下奉文名で再度ビラが投じられたが無視している。

1946年2月日本語で投降勧告があり、2人の日本兵が投降し、3月下旬までに41名が山中から出て投降している。

1949年9月赤津一等兵が3回脱出を試みたが島田伍長につかまり失敗しかし4回目に成功し3名となった。フィリピン軍はビラを撒いてその中で赤津は「フィリピン軍は友人だ」と書いたが小野田氏は無視していた。

1952年1月、日比交渉が開始され、日本の記者が初めて入国し、2月には日本の中佐が飛行機の機上から投

降を呼びかけ、家族の写真や手紙を撒いたが、全く無視されている。

小野田氏らは食糧確保のため原住民から奪ったり、畑に火をつけたりしたため「残留兵討伐隊」が組織されようとしたが、朝日新聞記者の辻豊氏が大統領に「自分が投降をすすめる」と直訴して、現場に行き日本の歌謡まで歌つて投降をすすめたがこれも無視されている。

1954年5月7日、共産系のゲリラを攻撃中のフィリピン軍を敵と思ひ込み発砲したため反撃されて島田伍長が戦死した。

その遺体確認のため、厚生省職員と小野田敏郎氏（小野田氏の兄）、小塚氏の弟福治氏らが来て投降をすすめたが、これも無視されている。

1959年島民殺傷を防ぐためフィリピンの討伐隊が派遣され、日本でも救出活動が始まった。5月に敏郎氏(医師)、福治氏が再来したが不可能であった。

11月には日本、フィリピンとも2人の死亡を認めている。1972年小塚金七氏が射殺された。

1973年4月まで3回にわたり日本の関係者が探索したが、小野田氏は遂に現れなかった。

1974年2月鈴木紀夫氏が小野田氏と会うことが出来て「上司の谷口少

佐の命令なら山を出る」との約束を取り付けた。

1974年3月9日、谷口少佐の命令で投降され、同年3月12日30年ぶりに帰国されている。

小野田氏関係の著書はご自身の著書も含めて数冊あるので左記にお知らせする。

- 『幻想の英雄 小野田少尉との3ヶ月』津田 信(ゴーストライター)
- 『わがルバング島の30年戦争』小野田寛郎 1974 (講談社)
- 1999 (再刊、日本図書センター)

以上小野田寛郎氏の30年戦争をご紹介します。

### 広告目次

- (株) セレモア……………表紙3
- (株) 東京都民互助会……………表紙3
- ローレルバンクマシ(株)……………表紙4
- 大樹生命保険(株)……………10
- (株) 武蔵富装……………59
- 信和株式会社……………59

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。